

わたしは不完全

菊地

洋子

おばあちゃんとおにぎり（幼少期）

高度経済成長期にあたる時代、ちょうど映画の「ALWAYS 三丁目の夕日」と同じ背景の中で、私は世田谷区太子堂という場所に生まれた。

家はたばこ屋の角から、L字型に曲がった小路の中程にあった。木製の引き戸でできた門を入り、小さな庭を抜けて家の裏に回ると、毎朝お祖母ちゃん（父方の母）が早起きし、薪でご飯を炊く大きな羽釜をセットする場所があった。

私は大好きなお祖母ちゃんといつも一緒にいて、寝るときも隣にぴったり布団を並べて寝た。誰のものなのか地味な色合いの古いセーターをほどいては、上手に色を組み合わせて着物の上に羽織るカーディガンやら三角ストールをよく編んでいたが、たまに赤やピンクの色物があると私の物を編んでくれた。私が「よこちゃんも、あみたい」と言うと、三つ程しかない象牙のかぎ針の中からこちらの手に合うものを選んで持たせ、ていねいに教えてくれた。そのお陰で私も若い頃は、何着か手編みで自分の物を仕上げて着ていた。

また、お祖母ちゃんは、羽釜で炊き上げたばかりの、まだ誰も手を付けていないご飯を、毎朝欠かさず神棚と仏壇に供え、その前で手を合わせながら家族一人ひとりの名前を読み上げ日々の無事を祈り、それだけでなく先立った何人かの息子の名前も、朝に夕にと祈っ

ていた。

先祖が眠る墓地に行った時は、お寺のお坊さんもお祖母ちゃんの信仰心や人柄を褒めてくださり、その恩恵で必ず高級なお茶と和菓子のおもてなしを受けた。その頃の私はまだ、真の神様を知らなかったこともあり、お祖母ちゃんのような人になりたいと、幼いながらにお坊さんのお話を熱心に聞いたものだった。

その様にして神仏への祈りを終えて、今度は羽釜の所へ行き、残っているごはんをお櫃に移し、鯉節の箱を出して「カシュツ、カシュツ、カシュツ」と削り始める。ひとしきり削り、できたてを羽釜の中へ放り込み、それからお釜にへばり付いたお焦げのごはんめがけて醤油を一まわしかけ、大きなしゃもじでかき混ぜながら私に笑顔で言った。

「ほーら、できたよ」と。そして私の小さな掌にのせてくれた。

そのお祖母ちゃんは、私が一六歳の時に亡くなった。

あの時食べた美味しいお焦げごはんは今では食べられないが、私の内にはお祖母ちゃんから受け継いだ信仰心が確かにある。イエス様が私の心の戸を叩かれたのはそれから十数年後であるイエス様を、きつと伝えていただろう。

出会い

中学二年生の時、大切な日記を一番安心して信頼している母に読まれていた事に気付いた。以来私は母に対して厳しい目を向ける様になった。そればかりでなく父に対しても怒りが溢れ、それまでの尊敬の思いは一変して反抗的になってしまった。

私は早く家から離れたいと思う様になった。都内の私立女子高校に通うようになると、さっそく禁止されていたアルバイトを始めた。同級生のお姉さんが働いていた生命保険会社で事務の仕事をした。

早く就職出来るように高校三年になってから珠算塾に通い有利な級をとった。高校三年の秋に学校から推薦されて、先にアルバイトをした生命保険会社に内定が決まった。

入社後の配属は本社の貸付、解約の手続きをする保全課であった。電話対応など、しどろもどろの中で、私を助けてくれた後に夫になる彼と個人的なお付き合いがはじまった。彼には私が好まぬ習慣が色々あったが、早急に身辺整理をし、その習慣から脱したと告白してきた。そんなひた向きさが、憂いに沈んだ私の心に灯をともした。純粹で前向き、積極的で明るく社交的、自信ある彼の行動力が好きになり、結婚を前提としたお付き合いが始まった。

嘘ばっかり

結納を済ませ、結婚式の日も二ヶ月後に迫ったある日、彼に異動の辞令が出た。

掲示には本社人事部付けとなっていた。彼は私に自分の夢を語り、結婚を目前にして会社を退職してしまった。結婚を反対する先輩方もいたが、私にはその理由が分からないことと、早く実家を離れたい思いがあつたので、予定通り結婚式を挙げた。

一年が経つころ、私は酷く体調を崩した。食事も水も飲めないほど衰弱し、爪という爪はすべて反り返り、薄く小さなお盆が指の先に張り付いている様に見えた。始めの子を授かったのだ。

あまりの状態に仕事も休み実家に帰らざるを得なくなり、母の勧めで私が生まれた広尾の日赤病院に行くことになった。幾つかの大きな卵巣嚢腫が子宮を圧迫して赤ちゃんが育たない状態だったため、緊急に手術することになった。そのまま入院し、翌日に開腹手術を受けた。しかし七日目の朝、赤ちゃんは天にあげられた。

その後、私は体調がなかなか戻らず、その年の年末に退職した。

翌年長男を授かったが、夫の収入はパート代にすらならず、私の退職金や貯金はもう底を突くばかりになっていた。

夫に転職を促し、やつとまともな給与が振り込まれる様になると、夫は帰りの電車がな
いからと家に帰らない日が増えた。

環境が変われば夫も変わるのではないかと社宅に引越しをした。次男も授かり、生活は
安定したかの様に思えたが、夫は「仕事上の付き合い」と言っては夜明けまで遊んで帰る
ことが多くなつた。悪友らの誘いを断りやすい様にと、隣の公団住宅に移つたが、もは
や環境や友達の影響でないことを、時待たずして私は知つた。

次男は一歳を過ぎる頃から毎日喘息の発作を起こし、夜中に救急で病院に駆け込むこと
も多かつた。私は長男が泣いてばかりいるとイライラし、逆に叱りつけたりした。

結婚前に夫は「自分からルーツを作る」と豪語していたがその言葉もむなしく自分本位
だつた。私は彼に振り回され、身も心も疲れ果てどうにもならず、心の底から叫んだ。

「小さい頃からずっと私を守ってくださつた神様、どうか助けてください」

それから間もないある日、幼稚園バスに長男を乗せ見送つた後、別の場所で乗り降りし
ている同級生のお母さんが来て言つた。

「うちの子、日曜学校に行つてるの、今度ひろ君も一緒に連れて行つていいかしら」と。

「日曜学校ってなあに」と尋ねると、彼女は「日曜日、教会で、ノルウエーの宣教師が子
どもたちに聖書の話をしているの」と言つた。なぜか安堵を覚え、長男を彼女に託した。

暖かく大きな存在

長男が日曜学校に通い始めた頃、同じ幼稚園に通う一学年下の子のお母さんから、生協班に誘われて加入した。また、配達がある日はそのお宅に集まって、牧師さんから聖書を学ぶらしく私も声を掛けられた。ちようど長男の事もあり、聖書も読んだことがなかったので興味を持った。日本人の牧師と聞き、私はふたつ返事でお邪魔する事にした。

初めて行った日は、いきなりイエス・キリストが十字架に掛けられる場面の話だった。「十字架の上で、どんな気持ちで叫ばれたのか、息を引き取られる時どんな思いだったでしょうか」と牧師が問いかけるが、誰も一言も言わずにしんみりとした時間が過ぎた。

だが、その不思議な時間と内容に私は引き込まれ、続けて足を運ぶようになった。

ある日牧師が来られないというので「田原米子さん」という人の証テープを聞いた。カセットから声が流れると私の耳はその内容に釘付けになった。高校時代によく使ったなじみ深い、小田急線新宿駅のホーム構内での出来事だった。

【当時高校三年生だった彼女は最愛の母の死が引き金になり、小田急線新宿駅ホームから投身自殺を図る。一命を取り留めるが、右手第一指、二指、三指を残し、両足、左腕を切断するという障害を負ってしまう。再び彼女は自殺をひそかに計画する。そんな中、毎週

面会に訪れる宣教師と若い青年通訳者がいた。彼女は宗教を頑なに拒んでいたが、ある日何気なく宣教師が置いていったカセットテープを聞き、いつにない安らかな眠りについて。翌朝自分の指を見た時「三本もある。三本も残して頂いた」という思いに変わる】のだ。

その時私ははっとした。「私を助け続けてくださった本当の神様はこの方だ」と。長男の涙も、私の心の叫びも受け取ってくださると知った。

私は嬉しくて嬉しくて、教会に行つて献金を捧げたくなつた。牧師先生に伝えると、団地内で礼拝している姉妹の家を教えてくださったので、早速出席した。捧げた献金はわずかな金額だったが、喜んで捧げられたことが感謝だった。

午後は聖書の学びで、暗唱聖句が宿題であつた。私は聖書を注文し、届いた日から暗唱聖句を始めた。

『しかし、自らの罪を神に告白するなら、神は真実な方ですから、その罪を赦し、すべての悪からわたしたちをきよめてくださいます』（第一ヨハネの手紙一章九節）

一人で繰り返し返し何度も朗読していた時、突然「神様は全て知っておられる」と悟つた。心の奥に隠れた数々の罪に光が当てられ、過去へ遡り、示される事はすべて一つひとつ告白した。そうして二時間半程が過ぎた時、暖かく大きな存在が私を包み込み「あなたの罪は赦された」という確信が与えられた。しばらく涙が止まらなかつた。

受洗 わたしに従いなさい

罪の告白をした次の礼拝の日、私は自分の身に起こった事を皆の前で話した。すると、牧師先生や夫人、その場にいた全ての兄弟姉妹が驚き、口々に「救われた」と涙を流し、喜んでくださった。今も鮮明に覚えている。

『言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある』（ルカの福音書一五章七節）

あの時あの場所での喜びは、まさにこの通りであった。

私は洗礼を受ける決心をし、牧師先生にお話しすると、三カ月後のイースター礼拝で洗礼式を予定しているらしく、その日一緒に受洗することになった。

洗礼の準備が進むにつれ、夫の自分本位な行動はどんどんエスカレートし私を苦しめた。止めると言ったはずの悪習慣はすっかりもとに戻り、数々の問題が押し寄せてきて私は望みを失いかけたが、神様は私に問題を解決する知恵を与え、応援者も与えられ、乗り越える力を与えてくださった。

こうしてお腹の三人目の子も守られた。

洗礼式は牧師先生の開拓教会で行われることになっていた。しかし、九ヶ月の大きなお

腹で五歳の長男と三歳の次男二人を連れ、電車を乗り継ぎすることは非常に困難であった。夫は最後まで私の信仰を邪魔し、結局その日私は、洗礼を受けることが出来なかつた。先生に事情を話すと、後日再び受洗の準備をしてくださることになった。

それから二週間後、一九八八年四月二五日の主日に、私の洗礼式は行われた。

当日は夫の運転する車で教会へ行き、子供たちも守られて洗礼式に臨むことが出来た。『あなたは、わたしに従いなさい』（ヨハネによる福音書二一章二二節）主はそうおっしゃられ、私は穏やかな心で公に神の子となった。

その二週間後の主日の朝、喜びの内に三男が生まれた。

礼拝が終わった後、兄弟姉妹が寄せ書きを携え病院に駆けつけてくださった。その暖かさが身に染みて嬉しかった。

その後三人の子どもを連れてはその教会に行く事が困難であつたため、近くの教会を姉妹から紹介され、同じ市内の自転車で行かれる教会に行くようになった。

あれだけ大騒ぎをした夫だったが、私がいつも喜びに満ちて礼拝で受けた恵みを話していたためか、時間のある日はひよっこり教会に顔を出すこともあつた。

驚いたことに夫は思春期に、教会学校へ通っていたと話し出した。

苦しくても（受洗く三〇歳代）

洗礼を受けた私は、毎日子どもたちが起きる前の朝五時に、誰もいない教会に行つて祈り、その後の六時からの早天礼拝に出る生活を続けた。

夫はその半年後に洗礼を受けた。日曜日がお休みのクリスチャン企業に導かれていつも礼拝に出られるようになった。その後一二年間は大きな波乱もなく、恵みの中で家庭も教会生活も守られた。

私は、婦人会長やCSの教師をし、毎週、家を開放し牧師先生に来て頂いて区域集会を開いた。団地に住んでいた時は、一時は六畳の部屋に一二人も集まった。その頃から住む家についても祈り始めた。

聖歌隊ではソプラノのソロを賛美し、コンサートの時は、二百人程の観客を前にプロの音楽家たちの演奏をバックに、スライドで物語のナレーションをしたこともあり、とても輝かしい教会生活であった。

夫は、礼拝の司会をしたり、行事などを計画し、兄弟姉妹や子供たちを楽しませた。

その頃、区域集会で祈ったとおりの場所に、二世帯住宅を建てることになり、神様の御業をいくつも見る事ができた。クリスチャン新聞に写真入りで掲載された。両親とも一

緒に住むようになり、二人が教会へ来ることもあった。

しかしそれが自分たちの信仰による結果でもあるかのように、知らず知らずのうちに高慢になっていった。純粹に歩んだ信仰の初めを忘れ、神様の御前に謙遜さもなくなり、古い自分が嫌な臭いを放つようになっていた。夫も教会では立派な人に見えたが、根本的には変わっていないかった。

燃える火の炉（四〇歳代）

夫に、リストラ対象者として会社を退職するようにとの話が来た。三カ月の猶予期間の後、退職になった。それから一か月が経つか経たないうちに会社の商品から〇157が検出され、突然会社が倒産した。それはテレビでも報道された。

夫はクリスチャン企業を手掛けている兄弟の勧めと助けにより在庫商品を安く卸売りする会社を起ち上げた。しばらくはその事業も順調に進んでいたが、見る見る経営はおかしくなった。家には取り立てが押し寄せ、毎日FAX用紙がなくなってしまうほど多くのかかわしい印刷物が入りました。

子供たちも学校帰りの道で「お父さん、どこ?」、「家に火をつけるぞって言っときな!」

と脅かされ、外に出られないほどの怖い思いもした。

そればかりでなく、夫は父と連名で建てた家の権利すら自分勝手に利用していた。私は頭の上からつま先まで裂かれ、心もずたずたになつてしまつた。

せめて教会だけでもちやんと繋がつていたいと思ひ、あちらこちらの教会をさまつた。

どうしたらいいのかと苦しんでいた時、知り合ひの牧師から「自分が知っている弁護士を紹介してあげるから、相談してみたら？」と連絡してくださつた。

早速、予約を取り、父と母に現状を説明して一緒に行き、すべて請け負つてくださることになり、やつと光が見え始めた。弁護士費用は父が財産をなげうつて払つてくれた。

こうして私と子供たちは、火の中をくぐるように助け出されたのである。

明けない夜はない（五〇歳代）

ちやうどその頃に、やつとの思いで訪ねた教会が南越谷コイノニヤ教会であつた。古川第一郎牧師先生（故人）の書籍を使って、以前教会学校の分級（中高科）を導いていたことがあり、一度お会いしたいと思つていた。しかしまさか一番悲惨な時に、お会いするとは思つてみなかつた。

尚哉と一緒に連れて行った初めの礼拝の日に、先生は「明けない夜はない」というワーシップソングを、ギターを弾きながら賛美リードされていた。どれほどその賛美の歌詞と曲に慰められたかわからない。涙が止まらなかつた。礼拝が終わり帰る時、出口のところまで声を掛けてくださり、尚哉に御言葉のカードとCDをくださった。

転会を希望した時も、多くの難問があつたにもかかわらず、笑顔で親切に対応してくださった。先生の体調が良くない時、手に力が入らないからと私にギター伴奏を依頼された。微力ながら一緒に奉仕できたことは今でも私の胸を熱くする。

ある日、川口キングスガーデンの職員募集のポスターが貼りだされ、「事務職員募集」という文字を見付けたので、すぐに応募し、採用された。こうしてやっと生活が安定した。

その川口キングスガーデンで、三郷教会の持田牧師先生と出会った。

持田先生は私が勤め始めた頃、「みぎわ会」という、キングスガーデンの理事と牧師先生の会の代表を務めておられ、何度かお茶をお出ししたように記憶する。

古川第一郎牧師先生が召天され、私も尚哉も不安を覚えていた時に、どなたかから、「持田牧師先生は、確か改革派の先生だよ」、「カウンセリングの勉強もされたと聞いているよ」と教えられた。

三郷教会のホームページを開いてみた。なんと教会は我が家から車で二〇分ほど、こん

なにも近いとびつくりした。

東川口の改革派教会でも何人かの兄弟が声を掛けてくださったが、子どもが一人で行ける距離を願っていたので、尚哉と二人で三郷教会にでかけた。

私と尚哉はたくさんの教会をまわり、色々な思いをして来たので、どんな教会だろうかとても心配だった。

でも初めの日、受付で優しく迎えられ、礼拝の前奏で神様の臨在を感じてほっとし、心に平安が与えられた。

先生は川口キングスガーデンでお会いした時と同じように、穏やかな表情で優しく語られ、メッセージに大きな神様の愛を感じた。

尚哉も持田先生のメッセージはわかりやすいから、一人でも続けて来られると言った。半年が過ぎたころ、転会を考えて、四男の恵望に話しをすると、「あつ、俺も一緒に、転会できるかなあ？」と言い出したのでびつくりした。職場が変わってちようど日曜日がお休みになったので、自分も礼拝に行きたくなつたというのだ。

早速、持田先生にお話をして、家族三人一緒に転会することになった。

神の家族として迎え入れて頂いて、今に至っている。

誰もが不完全（現在）

苦しかった時期、クリスチャンのある国際弁護士さんを訊ねた時に、「ぜひ身に起こった経験を本にして出さない」といわれたことがある。しかしその時は、それどころではなかった。まして文才のない私には無理だと思っていた。

ところがこの歳になって同じ教会の敬愛する兄からJCP（クリスチャン・ペンクラブ）で、今自分史を書いているからどうかとのお誘いが掛かった。それもその兄が私の書いたものに目を通してくださるといふのだから、自らの人生を振り返り、整理する良い機会でもあると、勇気を振り絞って入会した。

人生を振り返り、書き起こし、何度も推敲を重ねるうちに、私は自分の心に癒えぬ苦しいしこりと悲しみがあるのを見つけた。

思春期に母から受けた出来事を通して、私は自分を大切に思えなくなっていた。自己を否定するほど心が荒んで、生まれて来ない方がよかったと思った。心の傷は、しこりとなり、「自分は愛されない者」というレッテルを貼り、自分自身を縛りつけていた。

そしてさすらい人の様に私よりも悲しい思いをしてきた人との出会いの中で、自分の心の傷を緩和させていたのかも知れないと気付いた。

自分の子ども達には同じ思いをさせたくない、と選んだはずの道が更に自分自身を苦しめるものとなった。

罪を悔い改めて救われたが『七の七〇倍赦しなさい』『あなたの父母を敬え』という教えには頑ななまでに従うことが出来なかった。

神様の教えを守ることも、家庭を幸せにすることも満足に出来ず苦しんだ。けれどそこには、いつも奇跡と言える神御自身のぎりぎりの快進撃があった。破船しそうでしない。波瀾万丈だけど放っておかれない。暗闇のどん底だけど光の方向へと導かれた。必ず助けの手を差し伸べてくれる人が現れて、神様の慈しみを感じた。

『わたしの目にはあなたは値高く、貴くわたしはあなたを愛しあなたの身代わりとして人を与え・・・』（イザヤ書 四十三章四節）

自分ではどうにもならない傷ついた心を神様の前に下ろした。身代わりとなったイエス様の真実の愛に癒された。長い間自分を縛っていた鎖から、ようやく私は解き放たれた。

心の奥に潜んだ暗闇も全て神は知っておられる。不完全だからこそ他人だけでなく、自分すら傷つけてしまう、そんな私を、いつも理解し、共にいてくださったのだ。

今は、母の事も、元夫の事も理解することが出来る。誰もが不完全なのだ。

愛唱聖句

*イザヤ書四三章四節

わたしの目には、あなたは高価で貴い。わたしはあなたを愛している。

*ガラテヤ二章二〇節私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きて
ているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

*第一コリント一三章一三節

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。
その中で一番すぐれているのは愛です。

愛唱賛美歌

*讚美歌三三八番 主よ、おわりまで 仕えまつらん

*聖歌二二三番 つみとがをゆるされ かみの子となりたる